

魏建功の遼代漢字音研究

中村雅之

1. 遼代石刻と近世音研究

伝統的な近世音研究において、その中心資料となったのは周德清『中原音韻』(1324)であり、その範囲も元代以降に限られていた。しかし清格爾泰等 1985 によって契丹小字による漢字音表記の状況が明らかになるや、近世音の対象範囲は遼代にまで遡ることになった。13-14 世紀のパスパ文字資料や、15-16 世紀のハングル資料の表す音形に直結するものとして、契丹小字資料は近世音研究にとって重要な意味を持っている。

清格爾泰等 1985 の契丹小字研究は遼代石刻資料(「哀冊」と称される皇帝皇妃の追悼文)を用いてなされたが、同じ資料の漢文面を研究対象としたのが魏建功 1936 である。魏氏は遼代石刻哀冊文の中に近世音的な特徴を見出した最初の研究者ということになるが、本稿ではその研究の評価を試みることにしたい。

2. 魏建功の研究

契丹小字はほとんどが表音文字であるから、「密」が/mi/と記され、「洛」が/lau/と記されるような、入声韻尾の脱落をうかがわせる事実さえ確認できれば、そこに近世音的な特徴を見出すことは可能である。実際、1970 年代後半以降になされた研究(清格爾泰等 1985 に結実する)ではそのような事実が確認されている。しかし魏建功の時代には契丹小字はほとんど読めておらず、音韻特徴の確認は専ら漢文の押韻状況の検討に頼るしかなかった。

では、各種の哀冊文の押韻において、入声韻尾の脱落が確認できるような例、つまり入声字と非入声字が押韻するような例が見出されたのかといえば、残念ながらそのような例はなかった。入声字は入声字のみで(かつての/-p,-t,-k/の混同もなく)押韻している。にもかかわらず、魏建功はそれらの押韻例を眺めながら、そこに中古音的ではない特徴を感じ取った。そしてそのような特徴が当時の北方漢人の発音を反映したものと考えたのである。

例えば、石刻の哀冊文では、月曷末屑薛の5韻が通押するが、魏氏はそれらの韻字のほとんどが『中原音韻』の「家麻」韻および「車遮」韻に含まれることから、哀冊文の押韻と『中原音韻』に類似の枠組みを予想した。そのいくつかを具体的に見ると、以下のようである。

[聖宗哀冊] 雪(薛韻)・月(月韻)・設(薛韻)・闕(月韻)・血(屑韻)・烈(薛韻)

[道宗哀冊] 達(曷韻)・発(月韻)・活(末韻)・伐(月)

前者は『中原音韻』の「車遮」韻にあたり、後者は「家麻」韻にあたる。後者の「活」が『中原音韻』の「歌戈」韻にあたるなど、いくつかのズレもあるが、それは宋代以降の変化によるものとした。同様に、他の通押例においても『中原音韻』との近似性を指摘している。

3. 学説史上の位置づけ

魏建功の研究をどのように位置づけるべきかという問題は簡単ではない。結果的に魏氏の見通し

が正しかったことは契丹小字の研究によって確認された。しかしまた、魏氏の立論が十分に説得力のあるものかと言えば、そうとは断言できない。月曷末屑薛の5韻が通押するような例については、詩と異なり哀冊文の押韻が厳密でなく通押範囲が広いのだと解釈することもできるからである。

それでもなお、魏氏の功績に対しては、一定の評価が与えられるべきだと思われる。それは、契丹小字の各々の元字に音価を与える際に、近世音的な特徴を予想しつつ作業をすることを可能にしたからである。契丹小字が作られたのは中古音を代表する韻書『広韻』の編纂よりも早く、契丹漢字音に中古音的な特徴を想定するのはごく自然なことと言える。しかし実際には、遼代漢字音は『広韻』よりも『中原音韻』の枠組みの方にはるかに近いものであった。たとえ魏氏の研究がなかったとしても、契丹小字の音価推定はなされたであろうが、事実として、清格爾泰氏を中心とするグループが魏建功論文を読んでおり、音価表で『中原音韻』との比較をおこなっている以上、魏氏の貢献は認めなければならない。

上述のように、哀冊文の押韻は一見すると中古音の枠組みから大きく外れるものではない。にもかかわらず、そこに近世音の匂いを感じ取ったのは、魏建功が『十韻彙編』の編纂などにも加わった韻書のプロであったからに他ならない。そのような氏の直感が、今に続く近世音研究のいわば“地ならし”をしたわけである。

#### 参考文献:

- 魏建功 1936, 「遼陵石刻哀冊文中之入聲韻」, 『天津益世報』7338 号(讀書週刊第 69 期).  
清格爾泰等 1985, 『契丹小字研究』, 北京: 中国社会科学出版社.